④ 宮城県気仙沼市／山証 及川貴博さん

自慢の味を積んで軽トラで復活をアピール

イカの塩辛、ノリ、フノリ、メカブなど、山証の珍味や乾物は仮設住宅に暮らす人たちに大人気だ

気仙沼の海岸線沿いで特産品のワカメやメカブの加工業を営む山証は津波で工場が被災。社長が亡くなった。九死に一生を得た息子は5代目として工場を再興し、以前からの卸売りに加えて、復活をアピールしようと移動販売で仮設住宅を回っている。

仙台から太平洋沿岸を通って青森へと至る国道45号線の沿道は、東日本大震災で大きな被害を受けた。とりわけひどかったのが南三陸町から気仙沼市街へと至る海岸線沿いで、津波で甚大な被害を受けた。並走していたJR気仙沼線も線路ごと流失。昨年の8月からバスによる代行運転が始まったが、この地がいつどのような形で復旧するのか、見通しは立っていない。

いまもいたるところで工事が行われるなか、海に面した高台にひときわ大きな工場を構えるのがワカメやメカブなどの海産物の加工を行う山証。国道と海に挟まれるように建っており、

山証の主力製品のひとつだったのが、ホヤを使った数々の製品だ。養殖場が被災して原料が入らなくなり、冷凍していた在庫も切れてきており、生産が難しくなっている。ホヤは養殖に3～4年かかるので、製造再開には時間がかかりそうだ。

いまでは訪問を楽しみにしてくれる固定客も増えた。軽トラでの移動販売が海産物加工会社を地元住民と結びつけた

国道側から見ると津波の被害を逃れたかに見える。しかし実際には甚大な被害を被った。

少しずつ着実に復興を遂げ、いまでは震災前の7～8割に生産量は回復した。その象徴ともいえるのが移動販売の軽トラだ。

山証が被災した工場の後片付けを終えたのは震災後3ヵ月ほどのこと。ようやく手作業で作った乾物を近くの道の駅で販売できるようになった。それから半年後には工場が再稼働。生産量は震災前に程遠く、休業中に離れてしまった取引先もある。しかし少しでも気仙沼を活気づけたいという思いから、卸売りだけでなく自社での直売も始めた。

この地で5代続く老舗として地域の人々を元気づけたい

まず震災の年の11月には気仙沼市南町の駐車場跡地にできた仮設商店街「復興屋台村 気仙沼横丁」に「及庄海草店」を開いた。屋号は先代社長・及川証越さんが命名した旧社名だ。自慢の珍味などを販売し、観光客やボランティアに好評を博している。

さらにその味を地元の人々にも味わってもらおうと、本吉唐桑商工会の支援を得て、昨年の年明けから週2回、軽トラによる移動販売を始めた。当初はスーパーやコンビニもほとんど営業しておらず、入手しにくい珍味はとりわけ重宝されたという。山証は地元産の良質な素材にこだわっており、人気商品というイカの塩辛などは、ご飯が何杯も進みそうな味と評判だ。

「震災前は小売りを行っていないため、『山証さんの品物はどこで買えるの?』と聞かれることも多かったんです。移動販売は地元の方々に製品を知っていただくいい機会にもなりました」

そう語るのは震災後に跡を継いだ代表取締役社長の及川貴博さん。軽トラは週2回、気仙沼市内の仮設住宅などを巡回する。

気仙沼漁港に水揚げされる代表的な魚は、カツオ、サンマ、フカ（サメ）の3つ。特にカツオの水揚げ量は日本一として知られる。なお山証は魚の加工は行っていない。海草類の加工とは設備が全く異なるため。

「移動販売は製品を知っていただく機会」と及川社長

フノリの加工業を営んできた。明治時代、初代が海苔の行商をしていたのが始まりだという。

父の代から珍味の製造も始め、大きな工場を構えるに至った。現社長の及川さんは実に5代目にあたる。

自宅から駆けつけた父親ともども波に飲まれ

2011年3月11日。あの地震が発生した瞬間、及川さんはその工場にいた。

「防災無線で6メートルという津波警報が流れていたんです。いままで警報で3メートルといっても実際は数十センチだったので、今回も3～4メートルくらいかなと甘く見ていました」

しかし地震の揺れが大きかったこともあり、従業員を全員避難させることにした。当時社長だった父・証越さんも100メートルほど離れた自宅から駆けつけた。帰宅の準備をする従業員に「気をつけて帰れよ」などと声を掛けていたという。

3月は海産物の加工工場にとっては最盛期。工場内には生のワカメやメカブが何十トンもあった。それらを放置するわけにもいかず、及川さんは工場に残った兄弟らと片付けていた。

そうするうちに津波の第1波が到達。警報では6メートルだったが、10メートルはあるように見えたという。しかし海面か

各販売地には、商品の多くが賞味期限を迎える2週間に1度の訪問を目安にしている。

定位置に駐車した後は、スタッフが戸別に住宅を回って声を掛けていく。直接声を掛けることで仮設住宅で暮らす人たちに安心感を与えたいと及川さんはいう。商品が日用品や生鮮食料品のように必需品ではないだけに、軽トラでの移動販売はなかなか黒字にはならないが、山証が復活したというアピールには十分役立っている。

山証の法人としての創業は1979年だが、以前よりこの地で特産品のワカメやメカブ、

移動販売に軽トラの機動性がいかされている

移動販売を始めた当初に人気があったのはワカメ。ワカメは毎年3月が生産期だが、多くの加工会社で保管用の冷蔵庫を津波で流失させた。山証は流出をほぼ免れ、貴重な三陸産ワカメとして重宝されたという。

ら20メートルほどの高台に建つ工場までは襲ってこないだろうとも思っていた。

「下の家が流されているのが見えたので、父と海に面した駐車場まで見に行きました。水が引かないなと思った瞬間、うわっと第2波が襲ってきたんです」

駐車場からは遠くの海が一望できるが、目の前を通るJR気仙沼線などが死角となって間近の海は見えない。そのためより高い第2波に気づかず、駐車場に立っていた及川さんらは逃げる間もなく、津波に流された。

「津波は音もなく、でも凄まじい勢いで襲ってきました。私は工場のなかへ押し流されたのですが、高い天井のすれすれくらいまで一気に水位が上がりました。工場が建っている場所が海抜20メートルくらいですから、最も高い波は22～23メートルはあったんでしょうね。さすがにもうダメだと諦めました」

水位はすぐに下がり、幸いにも及川さんは引き波で工場の外へ流されることもなかった。

「何が起こったのか、頭が真っ白になってわからなかったですね。裏手へ逃げようとしたのですが、道が濁流になっていて渡れませんでした。沖では海面が壁のようにそそり立っているのが見えました。あれが押し寄せてきたら、今度こそおしまいだと思いました」

その波は第2波の引き波とぶつかり合って折れた。そうして及川さんは九死に一生を得たが、同時に5代目の苦難の始まりだった。姉や残っていた従業員は裏手の土手に駆け登って助かったが、証越さんは第2波でいきなり外洋へと流され、帰らぬ人となってしまったのだ。

「みんなでがんばろう気仙沼」の旗は欠かせないアイテム

商品を台に並べた後、「今日もうかがいました」と仮設住宅の住民に声を掛ける

震災前の製造規模は1日3万パック。現在は当時の5分の1程度に抑えている。理由は風評。「設備的には震災前のレベルの製造はほぼできる状態。ですが風評で市場が伸びない。地道にやっていきたい」と及川社長。

荷台がそのまま店舗になるので開店準備も素早くできる。これも軽トラの機能上のメリットだ

電気も水道も止まったなかで懸命の復旧作業を続けたそこから移動販売で復活を果たす

震災直後は従業員の安否確認と、父の捜索に追われた。従業員とその家族は全員無事だったが、通信や交通の事情が悪いうえ、避難所暮らしの人もおり、安否確認には1ヵ月を要した。証越さんの遺体は8月末にDNA鑑定で判別したという。

一方で震災直後から、及川さんたちは工場の再開に向けてすぐに動き始めた。工場は高台の岩盤に建っていたこと、比較的海岸線に近く、他の住宅や車がぶつからなかったことが幸いし、鉄骨と屋根は残っていた。

しかし壁は壊れ、工場内には何台ものトラックが流れ込んでいた。加工や包装に使う機械もすべて海水を被ってしまって使い物にならない。電気も水道も通っていない状況。復旧作業ができるのは日中のみ。溜まった泥は手作業で掻き出した。機械はすべて分解し、使える部品は水で洗い、極力再利用した。

海産物加工業の半分以上が廃業したが

震災前の山証では30～40人が働いていたが、現在の従業員は17名。自宅を流された人も多く、震災直後は及川さんの自宅で大勢が寝泊まりしていた。

「国道45号の沿道はガレキの撤去がだいぶ進みましたが、復興は見た目ほど進んではいません」

かつて気仙沼の沿岸には山証のような海産物加工業者が無数に存在していた。その半分以上は廃業、あるいは工場を失って復興できずにいるのではないかと及川さんはいう。だからこそ津波から生き残り、復活を遂げた自分たちが、気仙沼を元気づけたい。及川さんからそんな気概がひしひしと伝わってきた。

気仙沼では昨年10月に「三陸映画祭in気仙沼」が開催され、被災地域で行われたイベントとして全国にも注目を集めた。被災した建物も劇場として使い、3日間で延べ8000人の観客を集めた。